

さんたまりやーほまれのおらしよ

—近代詩の—源流—

鈴木 亨

嘉永六年（一八五三）の黒船来航によって、日本の長い鎖国の夢は破られた。翌年には米・英・露との間に和親条約が結ばれ、安政五年（一八五八）には米・蘭・露・英・仏との間に修好通商条約が結ばれる。封建体制と鎖国とキリシタン禁制とは、幕藩政治の三本足であった。その一角が、まさに崩れはじめた。あとは連鎖反応で、みるみる総崩れという事態に追い込まれた経緯は、周知のとおりである。

キリシタン禁制にも、終末の日が近づいた。その端緒は安政五年正月、長崎における絵踏（えまたま）廃止（いわゆる踏絵は長崎では正月の年中行事になっていた）で、さらに同年の六月以降、前記各国との間に締結された通商条約の中には、その居留地内に、当該国人のための礼拝堂建立を認める条文が挿入された。かくしてまず文久二年（一八六二）に横浜に、ついで元治二年（一八六五）には長崎に、それぞれフランス人宣教師によって天主堂が建立される。（ちなみに、新教が建てた最初の教会堂は、明治八年に出来た横浜の海

岸教会である。）

その長崎に建立された天主堂こそ、いまでもその偉容を誇る大浦天主堂（国宝）にほかならない。ゴシックとバロックの混合様式といわれるこの天主堂は、創建当時は三基の塔をもっていたが、明治八年に拡大改造されて塔は中央の一基のみとなり、木造外壁は煉瓦壁石灰塗りになった。昭和二十年八月九日の原爆で破損したものの、同二十七年にはみごとに補修が完成している。

その創建に尽力したのは、フェーレ、ローカニニ、プチジャンら、パリ外国宣教会所属のフランス人神父たちである。長崎市の南郊、南山手町の丘の上にそそり立つこの天主堂は、建築中から「フランス寺」と呼ばれて長崎中の注目の的となり、日々見物人で賑わった。完成したのは元治二年正月で、「日本二十六聖殉教者堂」と命名され、六旬節主日にあたる翌二月十九日に、献堂式が行われた。当日はフランス領事をはじめ、多くの居留外人が集まり、折から碇泊中の仏・英・露・蘭の軍艦からは、艦長が武装したカトリック

ク信者の水兵十二名ずつをひきいて参列したりして、それはすこぶる盛大な式典であった。が、その日に限って、日本人はまるで姿を見せない。招待を受けた長崎奉行も出席せず、代理の下役が来ただけで、けつきよくこれがただ一人の日本人の参列者であった。

フランス寺には中央の塔下たかく、「天主堂」と大書した額がかかっている。これは明らかに日本人を意識し、その来訪を期待するものだ。神父たちは、新たな日本人の入信希望者はむろんのこと、かつてのキリシタンの後裔の出現もひそかに期待していた。その可能性が、たしかに長崎の町から感得されていたからである。しかし献堂式の当日、そうした日本人の来訪が皆無だったことは、神父たちをひどく失望させた。

かれらはキリシタン禁圧の手がまだゆるめられていないことを、改めて痛感したが、さしあたって手の下じようもない。当座は無聊をかこつほかなかつたけれども、やがてまたぼつぼつ見物人が来はじめた。そして約一か月後の三月十七日、ついにキリシタンの後裔にめぐりあうのである。その事情は、プチジャン神父が横浜在住の日本教区長ジラル神父に寄せた書簡（浦川和三郎著『浦上切支丹史』昭和十八年、所収）にくわしいので、以下に抜粋してみよう。

昨日十二時半頃、男女小兒を打混せた十二名乃至十五名の一団が天主堂の門前に立って居ました。ただの好奇心で来たものとは、何やら態度が違つて居る様子でした。天主堂の門は締まつて居ましたから、私は急いで門を開き、聖所の方へ進んで行きますと、参観者も後から尾いて参りました。（中略）

私は救主の御前に跪いて之を礼拝し、心の底まで感動せしめるに適切な言葉を私の唇に与えて、私を囲繞せるこの人々の中

より主の為に礼拝者を得しめ給えと嘆願いたしました。ほんの一瞬間折ったかと思ふ頃、年の頃、四十歳か五十歳かくらいの婦人が一人私の傍に近づき、胸に手を当てて申しました。

「ここに居ります私共は皆貴師様と同じ心であります。」

「ほんとう？ 何処の御方ですか貴女達は？」

「私共は皆浦上の者でございます、浦上では大抵の人が私達と同じ心を持って居ります。」

こう答えてからその同じ人が、直ぐ私に向かい、「サンタマリアの御像は何処？」と尋ねました。

「サンタマリア！」、この慶い御名を耳にして、もう私は少しも疑いませぬ。今私の前に居る人達は日本の昔のキリシタンの後裔に相違ない。私はこの慰悦を天主に感謝しました。そして愛する人々に取り囲まれて、聖母の祭壇の前に、私達の為にあなたがフランスから御持参下さいました彼の聖像を安置せる祭壇の前へ彼等を案内しました。

彼等は皆私に倣つて跪きました。祈を誦えようとする風でしたが、然し喜びに堪えないで、聖母の御像を仰ぎ見るや、口を揃えて、「そう、ほんとうにサンタマリア様よ、御覧なさい、御腕には御子ゼスス様を抱き申しておいでになります」と言うのでした。（中略）

この善良な参観者が聖母の御像を眺めて感動したり、私に質問を發したりして居る間に、他の日本人が聖堂に這入って参りました。私の周囲に居た彼等は忽ちパッと八方に散り散りとなりましたが、直ぐまた帰つて参りまして、「今の人達も氣遣いすることはありません。村の者で、私達と同じ心でございます

す」と申しました。

私は聖堂内を巡覧する人々が往ったり、来たりするのに妨げられて、參觀者と思う存分話をすることが出来ませんので、復出直して遇いに来る様にと、浦上のキリシタン——私は今日から彼らをごんごんに呼びたいのです——と取極めをしました。彼等が何を保存して居るか、少しづつ見ましよう。彼等は十字架を尊敬し、聖母マリアを愛し、祈りを誦えて居ます。然しそれがどんな祈りであるか、私には判りません。その他の詳しいことは近日中にお知らせ致します。

いわゆる〈潜伏キリシタン〉が、慶長十九年（一六一四）の大禁教令以来、二百五十年におよぶ沈黙を破ったのは、実にこのときのことだ。かくして浦上のキリシタンがまず発見され、ひきつづいて長崎県内だけでも数万人の信者の潜伏していることが明らかになった。となると、幕府は手をこまねいていられない。そしてもっとも尖鋭な浦上のキリシタンが、やり玉にあげられた。慶応三年（一八六七）七月、浦上は長崎奉行所の遊撃隊によって襲われる。同年十月、幕府は大政を奉還するが、この弾圧は明治政府によっても継承され、翌四年（明治元年四月）には、浦上全村の三千四百余名が二十一の諸藩に配流されるというむごいことになった。

浦上地方への弾圧は、〈浦上一番崩れ〉といわれる寛政二年（一七九一）のそれ以来、これで四度目である。そしてこの、いわゆる〈浦上四番崩れ〉がもっとも苛烈なものであった。ために浦上は、荒涼たる無人の原野と化してしまふ。

明治六年（一八七三）二月、邪禁門禁制の高札がついに撤去され、キリシタン迫害にも一応の終止符が打たれると、浦上の人々の悲惨

な〈旅〉もようやくおわる。信仰を全うして帰郷した者は、約半数。六百六十余名が殉教し、残余の者は苦難に堪えかねてやむなく棄教したものの、郷里にもどつてからは大部分がまた元の信仰に復帰したという。

かかる〈浦上四番崩れ〉は、日本近代史上の一大汚点だが、その間にもカトリック復興の準備は、着々とすすめられていた。中でもプチジャンによる諸経典の刊行という事業は、とくに注目に価するものであらう。

プチジャンは、万延元年（一八六〇）三十二歳のときに日本布教を命じられて故国フランスを離れ、その年まず沖繩の那覇に上陸して伝道に従事した。ついで文久二年（一八六二）横浜におもむいて、いよいよ畢生の活動を開始することになる。そして、前述したように慶応元年（一八六五）には、竣工したばかりの大浦天主堂で旧キリシタンの子孫に遭遇し、日本伝道のための確実な端緒をついにとらえるのである。

翌慶応二年、かれは司教に昇格し、同時に日本におけるローマ法皇代理に任命されて、日本の伝道の統轄者になった。明治九年（一八七六）東北教区が新設されるようになったけれども、かれは南方教区にとどまって布教にはげみ、同十七年（一八八四）その愛してやまぬ長崎の地で永眠した。享年、五十六。

さきに引用したプチジャンの書簡は、かれが浦上のキリシタンを発見した翌日にしるされたものである。したがってかれは、そこではまだ、連中が「何を保存して居るか」、その唱えているのが「どんな祈りであるか」不明だ、としている。以後かれは精力的に、連

中が伝誦しているところを聞きとり、また残存するキリシタン文献の収集につとめて、多くの編著を刊行するのである。

それらは『明治文化全集』の第十九卷（昭和三年）、〈宗教篇〉に紹介されているが、同書に掲載されている順に列挙すると、明治元年刊行の『聖教日課』、同二年刊行の『胡無知理佐无の略』、『科除規則』、『弥撒拜礼式』、『玫瑰花冠冠記録』、同五年刊行の『聖教初学要理』等、六冊にのぼる。

そのうち、『聖教日課』は信者たちが伝誦していた祈禱文を収録したものであり、『弥撒拜礼式』、『聖教初学要理』の二冊は、そうした伝誦や、古写本に範をとってプチジャン自身が新たに編述したものである。残る三冊は、いずれも往時の慶長・元和ころに刊行されたキリシタン文献を復刻したものである。そしてこれらの書物は、すべて中国の上海で印刷されていて、刷りは石版によるものだ。高札撤去以前のこととて、やはり国内で公然と印刷することは不可能だったのであろう。

ともあれプチジャンは、これらの書物を単なる好事のころからつくったのではない。それどころか、かれはこれらをもって、日本布教の、さしあたっての指針たらしめようとしたのである。

つまり、まだほんの草創期のことである。宣教師たちの覚束ない日本語で、諸経典を編もうとしても成算はなかった。そんな折に、突如として二世紀半にも及ぶ暗黒の歴史のかたから、よく鍊磨された日本語による経典がよみがえったのだ。苛酷きわまる禁教令下、六代、七代にわたるへ潜伏キリシタンが、それを伝えてきたのである。おそらく世界の宗教史上、無類の、奇蹟にもひとしい、それは事績であらう。

プチジャンは、その奇蹟的な恩寵を、ためらうことなく日本布教の路線の中枢に据えたのである。したがって近代日本のカトリック史は、いわば「祖法」の継承というかたちで、以後進展して今日に至っているわけである。

ここでしばらく、遠い日の「キリシタン史」の上に目を転じてみよう。それらの日々、キリシタン布教が行われたのは、天文十八年（一五四九）ザビエルが渡来したときから慶長十九年（一六一四）の大禁教令公布までの六十余年間のことである。

それは信長・秀吉による天下統一、さらに家康による封建制度の確立という激動期と、まるまる重なる。そして、そうした霸王たち、またそのもとでひしめき、うごめいた群雄たちのキリシタンに対する応接のしかたも、まちまちであった。

が、総じていえば、信長時代にはキリシタンは厚遇されたといつてよい。信長が「天下布武」を呼号し、天正七年（一五七九）その大業のモニュメントたる安土城を完成した際、その城下に教会堂をつくるのが許され、翌八年、金の十字架をいたたく華麗な三層の聖堂が、安土山麓の目抜きの場合に出現したほどである。その宏壮さは、城下町随一であったという。翌九年には、その三階が改造され、そこにキリシタンの中等教育機関で下級神学校を兼ねたセミナリオが併設される。木下左太郎は小説「安土城記」でこのセミナリオを扱っているが、あの記事はその天正九年の『耶蘇会年報』（コエリュエ執筆、イエズス会総長宛）に基づくものだ。

ところが、ついで翌十年（一五八二）には本能寺の変がおこって信長が死亡し、その直後に安土城も、また隣接していた教会堂も兵

火によって滅んでしまふ。

信長のころさしをついで、天下統一の覇業をいっそう押し進めた秀吉の、対キリシタン策は、当初は信長のそれを踏襲するものであった。当時、日本のキリシタン運動を統率していたのは、東インド管区（日本・シナを含む）巡察使のワリニャーノで、かれはザビエル以来の逸材だ。そのワリニャーノの適切な指導のもと、教勢は発展・充実の一路をたどっていた。その繁栄を象徴するかのような〈天正少年使節〉派遣の壮挙が、ワリニャーノ発案によって決行されるのは、本能寺の変に先立つこと半年ばかりのことである。——ちなみにそのころの日本人信徒は約二十万、内外の宣教師は合わせて百余人、教会堂の数は約二百にも達していたという。

天正十五年（一五八七）六月、秀吉は突如として禁教令を公布する。それは九州の島津義久討伐の際のことで、秀吉は九州の現地でキリシタンの隆盛ぶりを目撃して驚き、外国の領土的野心を疑ってこの挙に出たのである。しかし貿易に対しては、従来どおり保護政策をとりつづけたこともあって、この禁教令はあまり徹底して行われなかった。が、それにしてもこのとき以来、キリシタン運動が〈冬の季節〉を迎えるようになったことは事実である。

少年使節たちと行を共にしたワリニャーノが、少年たちといっしょに日本にもどったのは、天正十八年（一五九〇）のこと。秀吉の禁教令公布により、使節をヨーロッパに派遣することで東洋布教に新紀元を画そうとしたワリニャーノの思わくは、どうやら空振りにおわつたかに見えたものの、この俊敏な司教はなお不屈だった。かれは秀吉の懐柔につとめる一方、セミナリヨ、ノビシヤド、コレジヨ、などという教育機関を一段と整備・充実させ、また印刷技術を

ヨーロッパから導入することによって、經典刊行への道を開くなど、教勢の維持・発展のために力を尽くす。

なお、そうした間に、それまで日本布教を独占していたイエズスのほかに、さらにフランシスコ会・ドミニコ会・アゴスチノ会の三教団が布教に参加するようになった。わけてもフランシスコ会の進出はめざましく、その無暴なまでの活躍がさまざまな物議をかもし、ついには慶長元年（一五九六）の〈二十六聖人殉教〉事件をひきおこすに至るのである。とはいえ、かかる新情勢が、教勢の伸張のために大いに寄与するものであったことも争えない。

さらに朝鮮出兵（文祿・慶長の役）の失敗、秀吉の死去（慶長二年）、関ヶ原の合戦（同五年）とつづく混乱の中で、〈冬の季節〉に若干の弛緩が生じたという事情もあった。——それやこれやで、〈冬の季節〉のもとにあったにもかかわらず、当時の教勢は、かつての黄金時代たる天正期のそれをはるかにしのぐほどに盛んなものであった。

そして、家康の世に移る。開幕当初の家康は、宗教と貿易を分離して扱うという秀吉の行き方を踏襲し、キリシタンに対して警戒はしても、公然たる圧迫を加えず、黙認するかにみえた。けれども、やがて幕府の覇権が確立し、貿易上に布教を伴わぬオランダとの交渉が開始されるに及んで、貿易一本槍でいけるといふ自信をえるや、キリシタン禁圧、キリシタン教国の排除という方針をしいに鮮明に打ち出すようになる。そうしてついに、慶長十八年（一六一三）のキリシタン厳禁の布告、翌十九年の大禁教令、いわゆる〈大追放〉の布告によって、キリシタンの根絶という強硬策に出るのである。

上昇の氣運に乗っていたクリシタン運動は、ここで一気に奈落の底に突き落とされる。以後には、いうまでもなく江戸期いっばいの長い酷薄な、迫害と沈黙の闇が横たわっていたばかりである。

わたしはいま、ブチジャンの編んだ『聖教日課』の翻刻本を手にしている。その製作者は、上田敏。大正六年十月に、刊行されたものだ。

『明治文化全集』第十九卷の〈解説〉(松崎実執筆)によると、『聖教日課』の原本には、三版までのものがある。即ち、初版は明治元年に、再版は同四年に、三版は同七年に、それぞれ出ている。そして全集で紹介しているのは、そのうちの初版本で、わたしが手にしている上田敏編纂のものは、三版本の複製なのである。ところで、『聖教日課』とはどんな書物か。全集の〈解説〉によって、それを窺ってみよう。

内容は信者が日課として誦うべき祈禱書であるが、(中略)昔の切支丹時代の用語文態そのまま、特殊な宗門用語は羅葡語や葡萄牙語の訛を仮名に現わして用いてあり、而も全然句読を切らず、殊に元年版は文語口語混淆で、文態甚だ整わず、其上十二、三枚目まで殆んど仮名すくめで、それ以下の頁も四年、七年両版に較べると漢字が少なく、従って読み難いばかりではなく、一般には意味がわからぬ事と思われる。

これで内容の概略は知れると思うが、ついでにその体裁についても、同じ〈解説〉に聞いておこう。まず、明治元年の初版本は、縦五寸八分横四寸の小型和本で、見返しに本の表題や刊行年月、編者名などを大きく現わし、それから二枚の目次をおいて

本文に移る。本文は四十五枚で、一頁七行、一行約十五字乃至二十字、行間に縦線が這入って罫紙の体裁をなしている。というようなもので、用紙は唐紙、印刷は石版刷りである。また四年・七年の、再版本・三版本の体裁については、次のようにしている。

四年版は縦五寸六分、横三寸六分で、元年版より一廻り小さく、唐紙石版刷りの和装本で、一頁七行、一行約十五字乃至二十字なる事などは、元年版と同じだが、行間の縦線は無く、前述の如く祈禱文の数が七篇だけ追加されていて、従って本文の紙数が六十五枚に増している。即ち元年版は祈禱文の数が三十七篇、四年版は四十四篇である。両方共通に載っている祈禱文の配列順序は、ただ一篇を除くほか双方全く同じ。即ち四年版の方は「勤を始むる前の誦」が「勤を終って後の誦」の前に来ているだけの移動である。筆蹟も元年版と全く同一なる所を見ると、やはり貞方良助の筆に違いない。文態も同じ、用語もほぼ同一だが、ただ此の方が漢字が多く、文章も整い、いったいに読み易い。それだけ進化の跡を示している。

明治七年の三版本は手許に無いから判らぬが、故上田敏博士所蔵のものが現に京都帝国大学図書館にあるそうだ。新村出博士が「海表叢書」中に解題する所によると、大きさは縦五寸横三寸二分(即ち四年版より更に小型)、洋紙石版摺洋装、本文一六六頁、一頁六行、片仮名交り文、平仮名振りとの事。なお、手許にある上田博士翻刻本によると、篇数及び配列の順序は全く四年版に同じ。ただ一層文章が整い、且つ漢字が多くなっている点だけ異なっている。

以上の〈解説〉の記事によれば、初版本・再版本・三版本の三者間には、内容上、大差はない。目立つ違いといえ、再版本以降のものには七編が追加されていること、また版を重ねるにしたがって文章が整い、漢字の使用がふえていること、という二点である。

体裁上も、大差はない。ただ大きさが、縦五寸八分五寸、横四寸一三寸二分で、版を重ねるにつれてやや縮小されていっている点、また用紙が三版本だけ洋紙で、他は唐紙である点などの違いが目立つくらいだ。

なお、右の文中にもあるように、版下はすべて貞方良助という人物が書いているらしい。このひとは、プチジャンの秘書で、もと唐通詞付書記であったが、プチジャンの教化を受けて改宗帰依し、漢学の素養があったところから用いられて、プチジャンの伝道、および経典刊行の仕事を手伝うようになった。かれは、「プチジャンの口述を筆記し、或は羅馬字で書いたものを翻字し、或は古写本の字句を校訂し、更にそれらを浄書して印行したものである。」（〈解説〉）という。

さて、上田敏の翻刻した『聖教日課』は、前述したように、三版本に基づくものであった。もともと原型を復元したというのではなく、これは活字（本文9号）組みで、下段にラテン語の原文や、参考資料を添えたりしているのだから、編著と称してもよいものである。ただし、大きさを縦六寸、横三寸五分にしているようなところには、原型のイメージを保とうとする意図が認められる。ちなみに、外装はうぐいす色のクロス表紙（これが原書を模したものであるかどうかは不明）で、本文五十四頁。表紙には中央部に、〈聖教日課〉の四文字が二号活字で金箔押ししてあるだけという、内容

はもとより、外見もすこぶる簡素で、雅趣に富んだ小冊子である。さらに言い添えておくべきは、本書が上田敏の没後に刊行されているということである。かれは大正五年七月、四十四歳でみまかっているが、これはそのあと一年余りして上梓された私家版で、発行者は夫人の上田エツ子。頒価の記載がないところをみると、知己に贈った程度で、あまり多く印行されなかったのではあるまいか。

上田敏所蔵の原典は、さきの〈解説〉の記述によると、その後、京大図書館の所管になったらしい。京大といえ、かれは明治四十一年、ヨーロッパ遊学を終えて帰国すると、東大から京大に移り、以後没年までの足掛け九年間、同校の教壇に立っていた。本書には、「大正元年八月」の日付をもつ自序がしるされているので、当然この編纂は京大在職中のこととみられる。

それにしても、大正元年に序文が書かれているのに、刊行が没後の同六年まで延引されたのはなぜであろう。たぶんその主たる原因は、かれの考証癖にあったと思われる。本文の校訂、またそれに添えた参考資料の渉獵・検討などに、存外手間だったであろう。

南蛮趣味やキリシタン研究熱が、広く高まったのは、白秋や李太郎に先導されて、明治四十年夏、新詩社の一行が九州旅行、それも主としてキリシタン遺蹟の巡歴をこころみ、その途次の通信を連中がリレー式に毎日、「東京二六新報」に寄せて好評を博したことに由来する。そしてその流行に油をそそいだのが、白秋の豪華な処女詩集『邪宗門』（明治四十二年）であった。

が、そうして明治四十年代に沸騰したその流行の、そもそのきっかけをつくったのは、ほかならぬ上田敏だったのである。かれにはすでに明治三十五年、「びるぜん祈禱」（「心の花」所載）の訳

業があった。それはダンテの『神曲』の「天堂編」第三十三歌冒頭三十九行を移したものである。また、同三十八年刊行の名詩訳集『海潮音』中に、よく練れた異教の用語を少なからず点綴したし、さらに翌三十九年には叙事詩の雄編「踏絵」(あやめ会詩華集『豊旗雲』所収)もものしている。このようになれば明治三十年代後半に、身辺にたきしめていた異教の薫香こそが、その源泉をなしたにちがいない。

かれはそんな先駆者であったけれども、キリシタン研究が本格的に学問として扱われるようになるのは、大正期も半ばを過ぎてからのことゆえ、まだその糸口を摸索中だったような時期に、本書の校訂・翻刻の作業にあたったかれの苦勞は、察するに余りがある。おそらくおおよその編集・装本の企画は、早く終わっていたとしても、なかなか刊行に踏み切れなかったというのが実際であろう。

ここで、私事にわたって恐縮だが、いま一つ言及しておきたいことがある。——それは、わたしがいま手にしているこの翻刻本が、かつて堀辰雄の所蔵だったという事情である。

もう三十年余りも前のことになる。当時わたしはまだ大学生であったが、詩誌「四季」の編集を手伝うようになって、堀さんのもとに出入りしていた。そんなある日、わたしがキリシタン研究に関心を示すごとき話を切り出したからでもあろう、「それなら」と言ってお堀さんは書架からこの『聖教日課』を抜き出すと、惜しげもなくポンとわたしにくださった。

堀さんがそれを、どういう経路で入手されたかはわからない。とにかく堀さんはいへんな蔵書家で、その書架のありようは学究的ですからあったこととて、存外な希覯本も多く収まっていた。そのく

せ、「ときどき蔵書は一掃して、身軽になるべきだ」と洩らすような、恬淡とした思想の持ち主であった。で、その時も、まさにへ惜しげもなくそれを投げ出し、その出自についても、価値についても何ら触れられなかった。たしか昭和十五年ころ、杉並成宗のお宅でのことであった。

この『聖教日課』については、当時、中里恒子さんが何かの隨筆の中で書いていられたような気がする。委細は忘れてしまったけれど、次の一節だけはおぼえている。——あるとき、中里さんは堀さんの書架にあつたこの清楚な書物に目をとめ、それを手にして繰っているうちに、そこに奇体なものが挿入されているのに気付く。それは、例の鹿鳴館時代を思わせる、洋服をまとった錦絵の婦人像の切抜きであった。それがへしおりがわりに、はさんであるのだった。中里さんは、堀さんとこの書物、さらにこの華美な切抜きという三者の取り合わせに、ひどく興じた、というくだりである。

幸いに、その切抜きもなお健在である。だが、それがどうしたわけでここに挿入されるようになったものか、そのいわれに關しても、わたしはいまだに何も知らない。

わたしはそのとき堀さんから『聖教日課』をいただいて、繰っているうちに、即座に「ここには近代詩の有力な源流、——それも最初の源流が認められそうだ」と直観した。とくに「聖母連禱」の訳文を見て、そう感じた。それはまことに清新・莊重な行文で、わたしを瞠目させるに十分なものであった。その際の鮮烈な印象を、わたしはいまもって忘れないし、今日それを見て、まったく同質の感銘を覚える。実はその感銘にもっぱら誘(おび)かれたながら、わたしはこ

基利斯当の御合力きりしだんごがかりつ 同
 諸々の御天神の皇后しよしよのぎょてんしんのこうご 同
 諸々の聖き先祖の皇后しよしよのせいせんすのこうご 同
 諸々の先知の皇后しよしよのせんちのこうご 同
 諸々の宗徒の皇后しよしよのそうたのこうご 同
 諸々の義の為に命を捧げし人の皇后 同
 諸々の行者の皇后しよしよのぎやう者のこうご 同
 諸々の童貞の皇后しよしよのどうぢんのこうご 同
 諸々の聖人の皇后しよしよのせいじんのこうご 同
 罪科の汚れなく孕り給ふ皇后 同
 世界の罪科を通し給ふ天主のひつてい 御主我らを赦し給へ
 世界の罪科を通し給ふ天主のひつてい 御主我らに聞き給へ
 世界の罪科を通し給ふ天主のひつてい 御主我らを憐れみ給へ
 天主の聖き御母我らの為に天主に願ひ給へ 我らが基利斯督の
 御約束を受け奉る様に願ひ給へあまみ

原文は総ルビであるが、煩雑にわたることを避けてバラルビとし
 た。また送りがなも、現行のそれに準拠して若干改めておいた。
 『聖教日課』は、さきの全集の『解説』にあったように、版を重
 ねるほど文章が整い、漢字がふえている。したがってこの『聖母連
 禱』も、最後の三版本のもののゆえ、全集所収の初版本のものと同ら
 べれば、そうした手入れがされていよほど見易くなっているとい
 える。が、両者の内容はほぼ同一で、その間に大差はない。次に念
 のため、へ初版本→三版本』という形で、その差異を明らかにして
 おく。

おらすしよ↓おらしよ きりしと↓きりすと 天帝↓天主 び
 るじんの尊きびるじん↓童貞の中に尤も勝れたる童貞どうぢん いたり
 て↓至って ほめあぐるべき↓頌めあぐべき 寛仁↓寛仁かんじん い
 げばたん↓玫瑰花 だびど↓たびと 汚れ↓汚れけがれ 聖き御母様せいぎごぼさま
 ↓聖き御母

両者間の用語上の違いは、これだけである。総じて言えば、後
 者、つまり三版本の改訂分の方がよい。なにしろ明治元年（一八六
 八）の初版本は、プチジャンがつくった最初の経典である。かれが
 『潜伏キリシタン』に遭遇するのは、元治二年（慶応元年）（一八六
 五）だから、その口碑を僅々三年間ほどでまとめたことになる。ど
 うしてもまだ、手さぐりのものにならざるをえなかったであろう。
 三版本は明治七年の刊行なので、それまでに発見されたキリシタン
 文献などを参照して、加筆・訂正が可能だったわけである。

ただ初版本の「いげばたん」「だびど」が、三版本で「いげばた
 ん」「たびと」になっているのはおかしい。「いげばたん」はへば
 らの意の九州方言なので、初版本のままでもよい。三版本の「いげ
 ばたん」は、誤植か、あるいは上田敏の勘違いであろう。「だびど」
 は、原語が *damia* だから、これも初版本のままでもよく、三版本の「た
 びと」はおそらく誤植と思われる。

ともあれ、それらは瑕瑾で、この『聖母連禱』の訳文が、『聖教
 日課』のみならず、ひいてはキリシタン文学全般の中での圧巻であ
 ることに変わりはない。本当いって、わたしはこれが十六世紀、即ち
 室町末期の制作とは、なかなか信じられなかった。けれども『聖教
 日課』に盛られた口碑が、現在するキリシタン文献中のそれと比較
 して大差ないものであることを知るに及んで、やはりこれは往時の

人々によって唱えられた祈禱文に近似するものと想定するほかないと悟り、嘆賞の思いを新たにしたのだった。

往時のキリシタン文献の中に、『聖教日課』に相当するものとして、慶長五年（一六〇〇）刊行の長崎版『おらしよの翻訳』というのがある。天理図書館所蔵の未公開の木版本で、内容を知ることができないが、その目次が『日本古典全書』の『吉利支丹文学集・上』（昭和二十三年）に紹介されている。それによると、同書には三十三編の祈禱文が収められていて、それぞれは平仮名書きのラテン語の原文に邦訳を並べたもの、あるいは邦訳のもののみといった仕組みである。ところが同書の最後に、この『聖母連禱』が「たつきびるせんまりやのらだいにあす」という表題で収録されてはいるものの、どうしたわけかそこだけにはラテン語のままの原文が示されてあって、その平仮名による読みも、訳文も載っていないらしい。

わたしの関知する限りでは、キリシタン文献で『聖母連禱』を収めているのは、この『おらしよの翻訳』のみであるが、それがこのありさまでは、前掲の訳文を往時のそれと比較することはまずわたしには不可能である。が、いま述べたように、『聖教日課』中の祈禱文群と、往時のそれとの近似値はきわめて高いので、わたしはこの訳文を、ほとんど往時のものそのままと考えたい。ここらみにその傍証として、よく知られている「パーテルノステル」——いわゆる「主の祈り」の、慶長五年刊・長崎版『どちりなきりしたん』所収の訳文と、三版本『聖教日課』のそれとを並べて比較してみよう。（なお、両者のあとに、参考までに現行の昭和二十三年刊『公会会祈禱書』中のものを添えておく。現行のカトリックの諸文が、『伝統の継承』という路線を重視するものであることの一端も、これに

よってうかがえると思う。)

てんにましますわれらが御おや御名をたつとまれたまへ、御代きたりたまへ。てんにをひておぼしめすまなごとく、ちをひてもあらせたまへ。われらが日々々の御やしなひを今日われらにあたへたまへ。われらにゆるし申すごとくわれらがとがをゆるしたまへ。われらをてんたさんにはなし玉ふ事なかれ。われらをけうあくよりのがしたまへ。あめん。（『どちりなきりしたん』）

天に在す我等の御親御名は尊ばれ給ひ、御国は来らせ給へ。天に於て思し召す儘なるが如く、地に於ても有らせ給へ。日々々の御養ひを今日我等に与へ給へ。我等が人に赦すが如く我等の科も赦し給ひ、我等を誘惑に放ち申すこゝれ。我等凶悪を遁し給へ。亜孟。（『聖教日課』）

天にましますわれらの父よ、願わくは御名の尊まれんことを、御国の来らんことを、御旨の天に行わるる如く地にも行われんことを。われらの日用の糧を、今日われらに与え給え。われらが人に赦す如く、われらの罪を赦し給へ。われらを試みに引き給わざれ、われらを悪より救い給え。アーメン。（『公会会祈禱書』）

『聖教日課』の訳文については、原文の総ルビを、バラルビに直した。また原文には句読点がないけれども、比較するための便宜を考えて、適当にそれを付しておいた。

ところで、『どちりなきりしたん』の訳文と、『聖教日課』のそ

れをくらべると、両者間に濃い血縁関係のあることは明らかだが、前者の方が古いものであるにもかかわらず、よく整っていて、逆に新しい後者の方に混乱がみられる。この混乱は、伝誦されているうちに生じた転訛によるものにはない。

このことから類推すれば、前掲の〈聖母連禱〉にもそうした転訛が存在するのかもしれない。が、この訳文は総じてよく整っていて、ほとんど破綻が認められないのである。しいていうなら、「いげぼたん」という方言や、「駆け込み」という俗語が混入しているあたりに、疑いをつけるべきであるが、元來往時のキリシタン用語は、口語・俗語がたてまえなのである。これらをむげに疑ったり、しりぞけたりするのは危険だ。

「奥ゆかしき玫瑰花」^{ひばたんか}「罪人の駆け込み」^{ざいじん}は、現行の祈禱書では「くすしきばらの花」「罪人の抛り所」とされている。妥当な訂正とは思われるけれども、もろ手をあげて賛意を表することもできない。前者のもつ古拙・豪宕な味わい、血の通った温かみの好もしさは、また格別で、それが後者にあつては払拭されてしまっているからである。なお、わたしはかかるうらみを、現行の祈禱書の随所に感得するのだが……。

イエズス会の宣教師たちの手によって、組織的に少年教育事業が行われるようになったのは、永祿四年（一五六一）ごろからである。それというのも、世界の教育史上、画期的なものとされる同会の学事規則が一五五九年に制定され、それが早速、日本にも到達したからだった。「島原、口ノ津、横瀬浦と次々に設けられた初等教育機関では、主として日本の改宗者、中でも元仏僧であつたものなどが

あたり、教理の他、国語、ローマ字、ポルトガル語の読書、算術、修身、音楽（主として讚美歌）、作法などを教え、やがて絵画、対話術、修辭法、演劇などもおこなわれ、約二十年後の天正十一年（一五八三）には全国ほとんどすべての天主堂に併設されてその数は二百校に達したという。殊にそれらは女子にも開放されたものであることを付記して置かなければなるまい。」（海老沢有道著『キリシタン文化概説』昭和二十三年）

そうした初等学校では、むろん宗教教育が重視された。シリンド著『日本に於ける耶穌会の学校制度』（岡本良知訳、昭和十八年）によれば、その実情は次のようなものであった。

児童は毎日ミサに出席し、ミサの後では、パーテルノステルを三回とアヴェエーマリヤ及び詩篇とを唱え、若しくは、聖歌^{カンテグム}を歌い土曜日には讚美歌「アヴェエーマリステラ」を歌った。午後には毎日老シメオンの「ヌンクデーミティクス」を誦しラウレトンの連禱を祈り日曜日祭日にはこれに代えるに聖母の連禱を以てした。

正午には宗教の授業があつた。十字架の前で生徒は祈禱文を唱し、出校の際に聖母頌歌^{アヴェマリア}を歌うた。日曜日には先ず全教区団員の出席を得て、ミサの前に児童は日本語の教理問答全部を唱し、正午には小鐘を携えて町を歩き、ドクトリナ、詩篇、連禱等を歌つて人々を祈りに導いた。天稟ある者は皆全部の讚美歌及び祈禱文を暗誦していた。

シリンドのこの記事は、神父フロイスが天正十二年（一五八四）一月、イエズス会総長にあてた書簡に基づくもので、フロイスがここで述べているのは、九州有馬における初等学校児童の日課、およ

び週間行事に関する報告である。天正十二年一月といえ、例の少年使節の一行がインドのコチン經由、喜望峰に向けて赤道を越えようとしていた時分である。

まさに当時は、キリシタン運動の黄金時代であった。しかも有馬はその運動の一中心地であったから、こうした模範的少年教育が実施されていたのであろう。しかしほかの初等学校でも、大なり小なり、こうしたたぐいの宗教教育が精力的に行われていたにちがいない。少年たちは正規のグレゴリオ聖歌の旋律で、讚美歌や祈禱文を自在にうたいこなした。この記事の中には、*ヘバーテルーノステル*も「聖母連禱」も出てくるが、少年たちはそれらをラテン語と、邦訳の日本語の両方でうたうことができたのであろう。

秀吉が突然、禁教令を発するのは、このあと三年しての、天正十五年六月のこと。この暴君の恐怖心と気まぐれによる禁教令が、不徹底なものであったことは前述したとおりである。のみならず、少年使節を伴って再び来日したワリニヤノが、秀吉の恐怖心をなだめ、さらに珍奇・豪華な舶来の品々を贈ったり見せたりしてその好奇心をおおったことが効を奏し、秀吉はたわいなく南蛮趣味のとりこになってしまふ。かれは好んでカルサンを着用し、また、西欧人にならうと鶏卵と牛肉に舌つづみをうつようになった。かくて、その膝もとの京都の武士の間にも、そうした風潮が蔓延するに至るのである。神父バシオが文禄三年（一五九四）九月にしたためた書簡は、そのさまを次のように伝えている。

関白殿がポルトガル風服装をたいへん好んだゆえ、彼の家臣たちもしばしばポルトガル風服装をまとい、これは諸侯たちのすべて、キリスト教を信じていないものまでも同様であった。

胸には流木製のロザリオ（数珠）をかけ、脇または腰から十字架を垂れ、ときには手に手巾をさえて持っている。彼らのなかにはすこぶるもの好きな人物もいて、*パーテルーノステル*と*アヴェマリア*の連禱を暗誦して、祈りをいいながら街路を歩いている。これはキリスト教信者をあざ笑うておこなっているわけではなくて、單純に当世風を氣どって、あるいはこれが善きことでありかつは世渡りに成功することに役立つことと思うからである。（岡本良知著「豊臣秀吉」昭和三十八年）

ここにも、*ヘバーテルーノステル*と「聖母連禱」が出てくる。しかもここではそれらを、キリシタン語でいうなら「せんちゅ」（異教徒）の武士が口ずさんで、新築された壮麗な聚楽第（天正十五年完成）の木の香も高い都大路を練っている。つまりもはやそうした聖歌が、流行の一風俗と化するほど、日本人の生活の深部にまで滲透していたことが知られるのである。そこで口ずさまれていたのは、ラテン語のものであろうか、それともさきの邦訳のものであるか。

上田敏が「聖教日課」の翻刻本をつくった意図は、どこにあったのであろう。それはひとまず、その「序文」にしろされているごとく、「これが翻刻を以て、明治初年公教会の狀態を恐るゝ一種の記念」とするつもりからであったが、かれの意図はそれにとどまらない。かれはつづけて、こう書いている。

「然し実はこれにはなお深い興味に伴っている。此書の扉に記るしてある千八百七十四年（明治七年）とは日本に於ける最後の基督教徒迫害が止まった翌年であるから明治初年の公教信徒間に有名な

るドミニック善右衛門等が、此書にある如き『こんたす』や『さるべれじな』を誦して迫害に堪え、却つて信仰を強くしたのかと思えば、これらの祈禱文を単に尋常一般の文学として見る事は出来まい。」「此書は明治初年の一珍本であるのみならず、遠く文禄慶長と連絡ある国文学上の価値ある一文獻であつて、種々の方面から学芸の士の注意を惹くものであらう。(中略)『聖教日課』翻刻の理由は、実に十六世紀から語り伝へた国語祈禱文の姿を示そうとする所にあるのである。』

文中にある「ドミニック善右衛門」とは、浦上キリシタンの中心人物であつた「ドミンゴ高木仙右衛門」のことであらう。へ四番崩れ」の当初、仙右衛門はじめ六十八名の男女が捕縛され、長崎市内を引き回されたあげく、投獄された。拷問に堪えかねて棄教する者が相次いだ中であつて、ひとりかれだけは最後まで動じなかつた。

かれは一介の、無学な農夫にすぎなかつたけれども、迫害の中でおのれを錬磨し、その举措・言説は取り調べに当たる役人どもを畏怖させずにはおかなかつた。かれが獄中で連中と交わした問答の記録は、まったく明快で、清冽きわまりないものだ。明治元年の大崩れの際、かれは同志二十七名と石見の津和野藩に配流され、その寒冷の地で六年の辛酸をなめて帰村すると、また率先して村民の教導に当たり、明治三十二年、七十五歳の高齢で永眠した。

そんな迫害の日々のうたごえに、上田敏は耳をすまし、さらにその向うに、遠く文禄・慶長ころのキリシタンのそれを聞き当てようとしている。それはまさに、「見よ、かかる殉教の士を。／天草は農人、／五島には鮫とる子も／ガリレヤ海の／海人の習と／悲節を守りつぐ。／代々に聞く名こそ異なれ。神はなほこの世を知る

す、ただひとり、おぼつかない、／今の求道者、／『識らざる神』の／証にと死する勇ありや。」「(踏絵) 明治三十九年) とうたいあげた敏の、面目というべきであらう。そのキリシタン史・キリシタン文化に対する一通りでない思い入れこそが、敏をして『聖教日課』の翻刻に従事させた要因と考えられる。

なおかれは本書には、「種々の方面から学芸の士の注意を惹くもの」があるという。このくだりは〈序文〉中、唯一の文学的発言だが、残念なことにそれはこれだけの抽象的な提言にとどまつて、具体的な言及は何もなく、また当時の他の文章にもそれは見当たらぬようだ。——かれのおもわくは、一体どの辺にあつたのであらう。

かれは当時、これも遺著になつた詩集『牧羊神』中の、訳詩の制作にはげんでいた。——『牧羊神』は、『聖教日課』におくれること三年の大正九年十月、大阪の金尾文淵堂から刊行された。編集はすでに作者の生前に終わつていたらしく、校正刷の一部には作者自身の手で朱が入られてあつたという。

所収作品は、すべて三十九編。創作詩・訳詩の二部仕立てで、創作詩五編がまず先行し、そのあとに訳詩三十四編がつづく。それらの発表時期は、創作詩の場合は明治三十八年から同四十年まで、訳詩の場合は一、二不明のものもあるが、明らかなものについていえば、明治三十九年から大正四年までである。即ち、創作詩は明治四十年止まりなのに、訳詩は大正四年にまで及び、しかもその三十四編のうち、二十五編もが明治四十三年以降につくられている。

詩形・用語の上からみると、文語定型詩たる新体詩形式をとつてゐるのは、厳密にいえば、全巻中わずかに三編。他はすべて文語・口語による自由詩、ないしは散文詩というわけで、そのうち口語に

よるものは明治四十三年以降に限られ、十九編に達する。

如上のことから、上田敏は明治四十三年以降——つまりここでいう当時、自由詩・散文詩形式による訳詩の制作に努めていた、しかもそれは総じて口語によるものだったということが出来る。

かれはさきに訳詩集『海潮音』（明治三十八年）を刊行して、新体詩の円熟相を誇示すると同時に、象徴詩時代を現出せしめた先達である。が、明治四十年代を迎えると早くも、かれを追った薄田泣菫・蒲原有明らと共に、〈朦朧体〉詩派というレッテルをはられて、その詰屈な詩風が批難の強襲にあい、詩壇からの退場を余儀なくされた。そうした情況は即ち、新体詩の崩壊を意味したのである。以後かれは、詩壇の埒外に立ち、また東都からも離れて自適するかにみえた。しかしかれもまた、〈口語自由詩〉という大勢に順応して、その方途を模索していたわけなのだ。

自由詩・口語詩への志向は、何も敏らを強襲した早稲田詩社の専売だったのではない。敏らの象徴詩運動の動静自体の中にも、それは孕まれていたのである。その際、敏にはその志向を、歌謡・俗謡の声調を手がかりに遂げようという気味が多分にあった。例えば、『牧羊神』中の文語自由詩形式による創作詩「ちやるめら」（明治三十九年）をみても、口語脈の部分は次のようにみなその行き方である。（この行き方は、泣菫にもみられた。）

「みそらかけりて、あの山越えて、／越えてゆかまし夢の里。」

「夢の浮橋、あならなつかしや／恋ひし、なつかし、虹の橋、……」

「人に思のなまなかあれば、／夢に現を代へ難き／——えい、なんとせう——あだ心。」

かかる方策の路線上に、『聖教日課』は置かれていたのである

まいか。つまり、詩語としての口語を、歌謡脈の伝統文芸の中になどどっているうちに、かれはこの祈禱集に遭遇した。そして、ここに近代詩の一流流を認めると同時に、口語自由詩の一点点を求めようとしたのではあるまいか、と思う。当時は、高村光太郎・萩原朔太郎の両者によって、個性主義・芸術主義に基づく口語自由詩確立への道が急がれていた。そうした折、敏が見据えていたであろう地平には、また別途の、民衆・民族のうたごえをかかえこんだ、〈開かれた口語自由詩〉の領域が期待できたように思われる。

ただ、わたしのこの推測は、いささかわたし自身に即きすぎたものになっているかもしれない。しかしそれにしても、敏の死によって中絶された『聖教日課』をめぐる課題の検討は、そのまま放置されていいてよいものではなからう。それはなお、十分に今日的な問題を含んだ宿題と、わたしには映るのである。